

交流欲

I

目次

交流欲 I (人間と「人間界」との交流)

序 交流欲について

- 一、 人間と人間との交流
- 二、 人間と社会との交流
- 三、 人間と人工物との交流

交流欲

I

(人間と「人間界」との交流)

## 序 交流欲について

この世にはもうありとあらゆるものや活動などに満ちあふれているわけだが、そのなかで、われわれ人間は、誰でも毎日実にいるいろいろなものとめぐり逢っては、その時々には様々な「思いや感情」などが生じて来るとともに、われわれ人間の「心の中」では、絶えることなくああでもないこうでもないという「思いや考え」などとともに、ああしたいこうしたい、あるいはあれがほしいこれがほしい、その他という、もう実に様々な「欲求」なども生じて来ることになるかと思う。それでは、われわれ人間の「心」というのは、いったい何を求めているのだろうか？ この問題について、すこし考えてみたいと思う。

例えば、誰でもテレビを観ていて、「なにかもつと面白いものややっていないかなあ」と思いながら、次から次へと「チャンネル」を切り換えることがよくあるかと思うが、それは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？ それは、われわれ人間の「心」というのは、いつも「なにか交流できるもの」を求めているということである。それゆえ、もし次から次へと「チャンネル」を切り換えても、これという「興味や関心」を示すような番組が見つからなかった場合には、その人の「心」は、次第にイライラしてきて、「もうまったくろくなものややっていないなあ！」などと愚痴をこぼすことにもなるわけだ。それは、その人の「心」としてこれという「交流できるもの」が見つからなかったということを示すものである。しかし、もう一度、次から次へと「チャンネル」を切り換えていくうちに、今度は、その人の「心」が何か興味や関心を示すような番組にぶつかれば、そこで「チャンネル」を止めて、しばらくその「番組」を観、それが興味深ければ、さらに、その「番組」を見入ることになるのだろうか。それは、その人の「心」として、やっと「交流できるもの」が見つかったということの意味することになるのである。

つまり、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めている。それゆえ、これという「交流できるもの」が見つからないと、われわれ人間の「心」というのは、次第にイライラしてくるが、逆に、これという「交流できるもの」が見つければ、そのイライラした「心」は、やがて落ち着きを取りもどすというように、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めている、それゆえ、これという「交流できるもの」が見つからない状態が長く続くことは、われわれ人間の「心」としては、極めて耐えがたいことであり、われわれ人間の「心」が、絶えず「何か交流できるもの」を追い求めてやまないのも、何か交流できるものがないと、われわれ人間の「心」というのは、次第にイライラしてきて、心の「安定や落ち着き」などを失ってしまう傾向があるからである。逆に言えば、何か交流できるものがあるが、初めて、われわれ人間の「心」というのは、安定や落ち着き、その他を得ることにもなるわけである。

\*

\*

それでは、われわれ人間の「心」そのものは、いったい何を求めているのだろうか？ この問題を徹底して考えるためには、どうしてもわれわれ人間の「身体的部分」と「精神的部分」とを便宜上、切れ離して考えてみなければならぬ。確かに、われわれ人間の「身体的部分」と「精神的部分」とは、切っても切れないほど一体化しているものだが、しかし、われわれ人間の「心」そのものは、いったい何を求めているのかを考える上では、どうしてもわれわれ人間の「身体的部分」と「精神的部分」とを切り離して考えてみなければ

ば、どうしても「心」そのものが、いったい何を求めているかを厳密に解明することはできにくい。それゆえ、その二つのものを敢えて切り離して考えてみたいと思う。

例えば、もしわれわれ人間に「肉体」というものがなければ、われわれ人間は、なにもあれこれ食べ物を取取る必要は、特にないだろう。しかし、「肉体」があればこそ、われわれ人間は、どうしてもその肉体を維持するためにも、食物を取取することが必要不可欠になってくるわけである。つまり、「食欲」というのは、基本的には「肉体から生じる欲求」になるわけである。また、もしわれわれ人間に「肉体」というものがなければ、われわれ人間は、なにも特にセックスをする必要はないだろう。愛情があれば、それで十分かも知れない。また、たとえセックスをしたいと望んでも、肉体がなければ、セックスをしようにもできないものである。つまり、「肉体」があればこそ、セックスは、初めて可能となるものであり、それゆえ、「性欲」というのは、基本的には「肉体から生じる欲求」になるわけである。そして、「セックス」そのものは、いわゆる「肉体の渇き」をいやす行為であり、一方、「心の渇き」をいやすのは、むしろ「愛情」の方なのである。

また、もしわれわれ人間に「肉体」というものがなければ、われわれ人間は、なにも「衣服類」をあれこれ買い求める必要は、特にないだろう。しかし、「肉体」があればこそ、われわれ人間は、実に様々な「衣服類」を買い求める必要がどうしても生じてくるわけである。それは、「住居」にしてもまったく同じことであり、もしわれわれ人間に「肉体」というものがなければ、われわれ人間は、自分の「肉体」を置くための住居というものも、特に必要とはしないだろう。それに加えて、家具類をはじめ、寝具類、履物類、食器類、化粧品類、付属品類、乗物類、食料品類、その他、そのようなものは、いわゆる「肉体の消滅」とともに、ほとんど不要になってしまふものばかりである。

\*

\*

確かに、われわれ人間の「心」というのは、実にいろいろなものを求めているものである。そのなかでも、いわゆる「食欲」と「性欲」それに「物欲」（金銭欲）などは、まさにわれわれ人間の「三大欲」（意欲的な「欲」）とも呼べるものである。そして、そのなかの「食欲」や「性欲」などは、基本的には「肉体から生じる欲求」であることは、誰にも容易に分かるものであるが、しかし、「物欲」や「金銭欲」などは、むしろ「心から生じる欲求」ということになるのかも知れない。

例えば、子供であれば、何か「遊び道具」（例えば「おもちゃ」）が欲しいと思うわけであるが、それが、まさに「物欲」である。そして、子供たちは、ふつう親にねだって自分の欲しい「おもちゃ」を買ってもらうわけだが、それによって、その子供のこの「おもちゃ」が欲しいという「物欲」は、一応満たされることになる。つまり、「物欲」というのは、その人が欲しいと思っているその「物」を手に入れてしまえば、そこで、その人のその「物」に対する「物欲」は、一応終わることになるわけだ。そして、その「おもちゃ」が欲しいという「物欲」が一応満たされることによって、今度は、その「物」と親しく交わろうとする、いわゆる「交流段階」に入ることになるかと思う。つまり、われわれ人間の「心」が、ある「物」を欲しいと思うのは、ただ単にその「物」が手に入れば、それでもうすべてが終わりということではなく、むしろ、その手に入れた「物」と親しく交わろうとするところにこそ、まさに「本来の目的」があるわけである。つまり、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めているということである。

例えば、ある女性がデパートに出かけて行って、そこで何か特に気に入った「洋服」を見つけたならば、その女性は、その「洋服」をどうしても手に入れたと思うだろう。そして、その「洋服」をどうしても手に入れたという欲求こそ、まさに「物欲」であり、その女性は、その場でお金を支払い、その気に入った「洋服」を手に入れることにより、その女性の、その「洋服」が欲しいという「物欲」は、一応満たされることになる。それでは、その女性は、その「洋服」を手に入れただけで満足するのだろうか？ もちろん、そうではないだろう。その手に入れた「洋服」を身にまとってこそ、初めて、その「洋服」を手に入れた「本来の目的」が達成されることになるのである。そして、その「洋服」を身にまとうことが、すなわち、その「洋服」との「交流」になるわけである。それは、「物欲」段階から、いわゆる「交流段階」へと移行することになるということである。

例えば、ある人が「車」が欲しいと思えば、それこそは、まさに「物欲」であり、そして、その人が欲しいと思っている「車」を手に入れば、その人のその「車」が欲しいという「物欲」は、一応満たされ、そのあとは、その「車」とどのくらい深く交わるかの「交流段階」に入るわけである。また、同じように、ある人が或る「ゲームソフト」が欲しいと思うならば、それこそは、まさに「物欲」であり、そして、その欲しいと思っ「ゲームソフト」を手に入れば、その人のその「ゲームソフト」が欲しいという「物欲」は、一応満たされることになり、あとは、その「ゲームソフト」とどのくらい深く交わるかの「交流段階」に入るわけである。それは、その他の「物」に対しても、基本的にはまったく同じことである。そして、その「物」とごくふつうに交わる段階が、いわゆる『交流1』段階であり、かなり深く交わるのが『交流2』段階であり、そして、どこまでも深く交わろうとする段階が、すなわち、『交流3』段階になるということである。

われわれ人間には実にいろいろなものをはしがるといふ「物欲」があるが、しかし、ただ単にその「物」を手に入れば、それでもうすべてが終わりということではなく、むしろ、われわれ人間の「心」は、その手に入れた「物」と深く交わることを望んでいるのである。——例えば、前々から読んでみたいと思っていた「本」を手に入れることができれば、その段階で、その「本」を手に入れたという「物欲」は、一応満たされ、そのあとは、その「本」とどのくらい深く交わるかの「交流段階」に入ることになるわけだ。そして、その読んでみたいと思っていた「本」を取りあえず読んでみると、その「本」を読む前に期待していたものと、実際に読んだ後との印象とでは、かなり違ってくるということが非常に多いかと思う。そして、もしその人が期待したほどの内容ではない場合は、その人は、「なあんだ、思ったほどではなかったなあ」とか、あるいは「まあ、こんなものかなあ」という感じで、その「本」との交わりもごくふつうの「交流1」段階で終わることが多いかと思う。一方、もしその「本」を読んでいくうちに、その内容に興味や関心を深めていけば、それだけその「本」を読むことに夢中になっていくかと思うが、そのように交わりがどんどん深まっていく段階が、いわゆる「交流2」段階になるわけである。そして、もしその人が何度もその「本」をじっくりと深く厳密に読み返しては、どこまでもその「本」との交わりを深めていくような関係になれば、まさに「交流3」段階になるわけである。それは、もうほかの場合でも基本的にはすべて同じことである。例えば、ある「物」を手に入れて、それを実際に使ってみると、それが「気に入る場合とふつうの場合と気に入らない場合」とがあるかと思う。もし気に入らない場合には、その「物」を使う（或いは

身につける)ことは少なくなるか、あるいは新しいものをあらためて買い求めることになるかと思う。そして、ふつうの場合であれば、ごくふつうに使う(或いは身につける)ことになるだろうが、その場合には、その「物」に対して特別の「思いや愛着」などが生じるといふことはあまりなく、ごくふつうに交わる「交流1」段階になるかと思う。

一方、その「対象」(物)に対して気に入るようになれば、その「対象」(物)との交流は、より深まり、それだけより「親しみや愛着」などを感じるようになるかと思う。それでは、なぜ、われわれ人間というのは、そのように気に入った「対象」と深く交わろうとするのだろうか。それには、次のようなはつきりとした理由があるからである。――すなわち、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めているとともに、われわれ人間の「心」というのは、その気に入った対象と、より深く、また、より親しく交わっているような時こそは、まさに「最も充実した、また、最も満たされた心の状態」になっていることである。

われわれ人間の「心」というのは、自分の「心」だけでは、なぜか心はイライラして安定も落ち着きも得られない状態であり、そのために、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めているということである。なぜなら、「何か交流できるもの」にめぐり逢うことによつてこそ、初めて、われわれ人間の「心」というのは、いわゆる「落ち着きや安定あるいは充実感」などを得ることになるからである。

## 一、人間と人間との交流

それでは、ここでもっと具体的に「交流欲」について考えてみたいと思う。まず、「図1」を見てももらえれば、すぐに分かるように、この世にはもうありとあらゆるものや活動などに満ちあふれているわけだが、それらのものとわれわれ人間との関わり(交流)とを大きく分けてみると、次のような幾つかに分類できるかと思う。つまり、一つは、「人間と人間界との交流」(①人間と人間との交流、②人間と社会との交流、③人間と人工物との交流)、次は、「人間と動植物界との交流」(①人間と動物の交流、②人間と植物との交流、③人間と古生物との交流)、そして、「人間と自然界との交流」(①人間と自然との交流、②人間と自然物との交流、③人間と宇宙との交流、その他)になるわけである。

それでは、まず最初に、「人間と人間」との交流について、すこし考えてみたいと思う。例えば、われわれ人間は、毎日、実にいろいろな人間とめぐり合うことになるが、それは、ただ単にその場に居合わせたり、通り過ぎたりするだけの極めて軽い関わりから、どこまでも深くその人間と関わっていくような関係まで実に様々な場合があるかと思う。そして、ふつうであれば、われわれ人間の「心」というのは、どちらかと言えば、「敵対するような心」ではなく、やはり「交流できるような心」を求めていることになるかと思う。

というのも、例えば、お互いあれこれ話をしている時に、お互いの「考えや意見」などが全く食い違って、もう少しもかみ合わないような状態では、お互いの「心」は、ただもうイライラしてくるだけで、お互い話をしていても少しも楽しくはないだろう。それは、親しい友だちや恋人同士あるいは夫婦の間でも全く同じことだと思うが、お互いの「考えや意見」などがうまくかみ合っているような時には、お互い話をしていても楽しく話もはずむものだが、逆に、お互いの「考えや意見」などが食い違ってきて、ああ言えばこう言

うという感じで、お互いの言い分をお互いに言い張って少しもかみ合わないような状態になれば、どんなに親しい間柄でも、だんだんとお互いの「心」は、イライラしてきて、最後にはもう大げんかになってしまふ危険性すらあるわけである。それは、一体、なぜなのか？ それは、われわれ人間の「心」というのは、あれこれ「敵対するような心」ではなく、やはりどこまでも「深く交流できるような心」を求めているということである。

確かに、われわれ人間の「心」というのは、実に多種多彩なものを求めているが、しかし、われわれ人間の「心」そのものは、一体、何を求めているのかと問えば、それは、やはり、われわれ人間の「心」そのものは、最終的には「どこまでも深く交流できるような心」を求めていることになるのだろう。——それでは、なぜ「心」は「心」を求めるのだろうか？ それは、ほかでもない、「心」と「心」とは最も深く交流でき得るものであり、また、最も深く「共感・共鳴・同感」でき得るものだからである。それは、われわれ人間の「心」と「心」とは、この地球上にある何よりも最も同類（同質）なものであり、また、最も同類（同質）的な働きをし、最も同類（同質）的な性格を持つがゆえに、最も深く理解し合えるものであるとともに、最も深く溶け合えるものでもあるからである。つまり、われわれ人間の「心」というのは、実にいろいろなものを求めているが、しかし、われわれ人間の「心」そのものは、一体、何を求めているのかと問えば、それは、やはり最も同類（同質）的な存在である人間の「心」を求めていることになるかと思う。

しかも、その「心」は、「敵対したり、拒絶反応を示すような心」ではなく、やはり「どこまでも深く交流できるような心」を求めているということである。それでは、「肉体」は、「肉体」を求めているのだろうか？ 敢えてそうだと言おう。というのも、「肉体」は、他の「肉体」との間で「皮膚接触や皮膚圧迫」（例えば「握手や抱き合うこと」）などを行なうことによって、お互いの肉体に「皮膚体温や皮膚圧迫」などが伝わるという、いわゆる「スキンシップ」などが生じてきて、「肉体」というのは、まさに「親しみや親近感」などを感じるとともに、「肉体」は、「肉体」とめぐり逢うことによって、一種の「安定や落ち着き」などを得ることにもなるからである。すなわち、「心」は、「心」を求め、そして、「肉体」は、「肉体」を求めているということである。

確かに、われわれ人間の「心」というのは、いろいろな「考えや人生観」などを持った人間とできるだけ数多くめぐり逢いたいという思いもあるかと思うが、しかし、やはり最終的には「敵対や拒絶反応などを示すような心」ではなく、やはり「どこまでも深く交流できるような心」を求めることになるかと思う。なぜなら、お互いの「心」が少しもかみ合わず、お互い敵対や拒絶反応などを示すような状態では、少しも楽しくないからである。やはり、お互いの「心」がどこまでも深く交流できているような時こそは、最も充実した、最も満たされた「心の状態」になっているものだからである。それゆえ、われわれ人間の「心」そのものというのは、やはり「できるだけ深く交流できるような心」を求めているということになるかと思う。

\*

\*

さて、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めている。そして、この世にはもうありとあらゆるものが存在するわけである。例えば、人間を初めとして、動植物や自然との交流、また、様々な天体や宇宙との交流、また、われわれ人間がこの世に生み出した実に様々な人工物との交流、それにわれわれ人間社会との交流があ

るかと思うが、そのなかで、われわれ人間の「心」が最も深く交流でき得るもの、最も深く理解し合い、最も深く「共感・共鳴・同感」でき得るもの、それは、ほかでもない、われわれ人間の「心」なのである。——なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、最も同類（同質）の働きをし、最も同類（同質）的な性格を持ち、最も同類（同質）的な考え方をし、最も同類（同質）的な「もの」の見方、とらえ方、感じ方などを行っているわけだから、われわれ人間の「心」とは、最も深く理解し合える、最も深く「共感・共鳴・同感」でき得るものである。それゆえ、われわれ人間の「心」そのものは、最終的には、やはりどこまでも深く交流できるような「心」を求めていることになるかと思う。

むろん、ほかの対象との「交流欲」も極めて旺盛であり、それゆえ、それぞれの「対象」とも深く交流でき得るものであるが、しかし、われわれ人間の「心」そのものは、最終的には、やはり人間の「心」を求めていることになるのだろう。というのも、お互いの「心」と「心」とが親しく交流し、深く「共感・共鳴・同感」できていて、お互いの「心」と「心」とが深く溶け合えているような時こそは、われわれ人間の「心」というのは、最も充実した、最も満たされた、最も深い「喜び」を感じることができ得るからである。そして、そのような「実感」こそは、われわれ人間の「心」そのものは、最終的には、まさにどこまでも深く交流できるような「心」を求めているという確かな証拠となるものである。つまり、われわれ人間の「心」そのもの、というものは、やはりどこまでも深く交流できるような「心」を求めているものであり、そして、お互いの「心」と「心」とが深く交流して、深く理解し合い、また、深く「共感・共鳴・同感」して、深く溶け合えているような時こそ、最も深い「喜び」を感じている時でもあるということである。

確かに、われわれ人間の「心」というのは、実にいろいろなものとの「交流」を望んでいるが、しかし、「心」そのものは、最終的には、やはりどこまでも深く溶け合えるような「心」を求めていることになるかと思う。

しかし、人によっては、わたしは、人間などの「心」よりは、可愛がっている動植物やお気に入りの所有物との交流のほうが遙かに楽しい、という人も非常に多いかと思う。もちろん、そういう場合も多々あるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」と「物」（或いは「お金」）とは、どこまでいっても異質なものであり、それゆえ、どこまでも深く溶け合えるようなものではないのである。また、われわれ人間の「心」と「動植物」とは極めて「親しい間柄」（つまり「同じ生きもの」）ではあるが、しかし、われわれ人間同士ほどではないのである。やはり、われわれ人間の「心」と「心」こそは、まさに最も同類（同質）のものであり、それゆえ、最も深く交流でき、最も深く理解し合い、最も深く「共感・共鳴・同感」でき、そして、最も深く溶け合えるものなのである。

それでは、われわれ人間は、なぜに絶えることなく、実に様々な「揉め事、争い、その他」などを起こしているのだろうか？ それはもちろん、われわれ人間には実に様々な「欲望や感情」（つまり「煩惱」）があるからであるが、それでは、その「煩惱」の源泉は、一体、何かと問えば、それはもちろん、いわゆる「利己的自我」（つまり「エゴ」）ではあるが、それに加えて、われわれ人間の「肉体」からのものがほとんどなのである。というのも、前にもふれた問題ではあるが、もし「肉体」というものが存在しなければ、われわれ人間の実に様々な「欲望」（例えば、食欲、性欲、物欲、所有欲、その他）などの、ほとんどの欲求が消えてしまうととも、それらの「欲望」が思うように満たされないた

めに生じる「不満や不平」なども消え、また、容姿や容貌あるいは老いや病いなどから生じる「不安や不満あるいは劣等感」なども、すべて消えてしまうことになるからである。そのような様々な「煩惱」が次から次へと消えていき、最終的に残るものは、一体、何なのか？ つまり、「肉体」が完全に消えて、「心」そのものとなった時に、われわれ人間の「心」そのものは、一体、何を求めることになるのかと敢えて問えば、それは、やはり「どこまでも深く交流できるような心」を求めることになるかと思う。なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、どこまでも深く交流できるような「心」と、どこまでも深く溶け合っているような時こそは、まさに最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっている時だからである。

## 二、人間と社会との交流

次に、「人間と社会」との交流について、少し考えてみたいと思うが。例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、また、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業、製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービスマネジメント、公務、また、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、ビデオ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、ゲーム、さらに、趣味、娯楽、旅行、賭事、遊び、犯罪（事件）、事故、その他、この世の実に様々なものや活動あるいは出来事、その他の直接的あるいは間接的な「交流」（関わり）ということになるわけである。

むしろ、「社会」というものを形成しているのは、まさにわれわれ人間であるので、「人間と社会」との交流とは、すなわち、「人間と人間」との交流とも深く重なり合うものではあるが、しかし、「人間と人間」との交流という場合には、やはり「相手との直接的な関わり」という意味合いがより強くなるかと思う。一方、「人間と社会」との交流という場合には、もっと社会組織や社会現象、その他などとの関わりが加わって来るために、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、犯罪（事件）、事故、その他、そのようなものに対して、われわれ人間は、もう誰でもああでもないこうでもないと言いつつながら、「現実の社会」と深く関わりつつ生きていくことになるわけだ。

そのなかで、自分自身が直接的に関わっているもの、それは、仕事（職場）や学校を初めとして、生活、趣味、娯楽、遊び、その他、何であれ、多くの「時間や努力」などを費やして深く関わっているものであれば、当然のことながら、それらとの「関わり」（交流）は、それだけより深いものになって行くものである。しかも、それは、まさに直接的な「関わり」（交流）であるがゆえに、例えば、その人が「プロ野球選手」であれば、当然のことながら、「野球」との「関わり」（交流）は、どこまでも深いものになるとともに、わが身に感じて、実感として、非常によく理解しているものにもなるわけである。つまり、仕事（職場）や学校を初めとして、生活、趣味、娯楽、遊び、その他、何であれ、自分自身が直接的に関わっているものであれば、それだけその「対象」との「関わり」（交流）は、まさに生々しい「確かな手応えのあるもの」になっていくということである。

一方、主に「メディア」（例えば、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、動画、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、メール、ツイッター、フェイスブック、その他）な

どを通じて、間接的に「関わる」（交流）する場合もあるかと思う。つまり、現実の社会では毎日毎日実に多種多様な出来事が世界中のありとあらゆるところで休みなく起こっているわけだが、それらを今日のわれわれは、主に「メディア」などを通じて、間接的に「見聞き読んだりして」いるわけである。——例えば、プロ野球がほんとうに好きな人であれば、もちろん、球場まで直接観に行く場合もあるだろうが、しかし、多くの場合、テレビの「野球中継」やラジオの「野球放送」などを見聞きする場合が多く、また、その試合の結果をテレビのニュースなどで再確認することにもなるのだろう。しかも、翌朝には、再び、テレビで観たり、新聞のスポーツ欄で野球記事を読んだりすることになるかと思う。もし、そういう人であれば、確かに「野球」との「関わり」（交流）は、それだけより深いものになるだろうが、しかし、それは、あくまでも「他人」（つまり「プロ野球選手」）が行なっているのを間接的に見聞きしている状態であり、それゆえ、実際に「プロ野球選手」としてプレーをしている人たちに比べれば、どこまでも間接的なものであり、それゆえ、直接的な生々しい実感の伴った「関わり」（交流）とは、はつきりと違うものである。

一方、プロ野球に全く「興味も関心」も持たないような人であれば、プロ野球をテレビで観たり、或いは、ラジオで聞いたりすることもほとんどないだろうし、また、新聞のスポーツ欄で野球についての記事を読むことも、ほとんどないことになる。それゆえ、その人の「プロ野球」との「関わり」（交流）は、極めて疎遠な関係であるとともに、その野球についての「知識」なども、極めて浅薄なものになりやすいということである。

それでは、これらのことは、一体、何を意味するのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、われわれ人間の「特性」というのは、全く「興味も関心」も示さないような対象に対しては、ほとんど「無知」の状態に留まり、それこそ、まさに「その対象のイロハ」（つまり「最も基礎的なこと」）すらよく分からないという状態になりやすいということである。——例えば、「将棋や囲碁」などに今まで全く「興味も関心」も示さなかった人であれば、たとえ「将棋や囲碁」の「対局」を真剣に見入ったとしても、何がなんだかその内容はさっぱり分からない状態に深く陥ってしまうものである。——つまり、何らかの「興味や関心」を示すことが、その「対象」を知るためのまさに「第一歩」となるものである。それゆえ、完全なる「無関心」状態は、すなわち、その「対象」に関する限りは、全くの「無知」状態に留まることになるということである。

そして、その人がその「対象」にどのくらい「興味や関心」を示すかにほぼ正比例して、その「対象」に対する理解もより深まることになる。その場合、自分自身がその対象に直接関わる場合と、主に「メディア」などを通じて、間接的に見聞き読んだりする場合とがあるかと思うが、むしろ、自分自身が直接的に関わっているものこそは、まさにわが身に感じて、実感として、理解しているものであるとともに、その「対象」との「関わり」（交流）の深さというのも、その人がどの程度の「学習段階」（つまり初級段階・中級段階・上級段階・そして専門段階のどの辺にいるか）にほぼ正比例して、それだけより深い、また、より厳密な「理解と関わり」（交流）になって行くということである。

一方、主に「メディア」やその他などを通じて、間接的に見聞き読んだりする場合であるが、その場合、最も問題になるのは、その「メディア」やその他からの「情報や知識」などが、どこまで「信用できる」ということである。つまり、「メディア」やその他からの「情報や知識」などをそのまま盲目的に信じることは、極めて危険なことであるが、

それというのも、自分自身が直接見聞き体験取材したのではなく、あくまでも他人が見聞き体験取材してきた、いわゆる間接的な「情報や知識」などであるので、どこまで「信用できる」かは、極めて難しい問題になるということである。それゆえ、「メディア」やその他からの「情報や知識」などを、そのまま盲目的に信じるのではなく、ほんとうにそうなのかどうか、いろいろな角度から厳密に「吟味・検討」を重ねて、できるだけ客観的に見極めることが、何よりも大事なことになるのである。

というのも、われわれ人間というのは、どうしても「新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、その他」などから報道される内容を、そのまま「事実」（或いは「真実」）のこととして盲目的に信じ込みやすい傾向があるからである。そして、たとえ報道される内容がまさに「事実」そのものだとしても、それをどのように報道するか（或いは記事にするか）によって、たとえ「同じ内容のもの」でも非常に違った印象を与えることになるからである。それゆえ、できるだけ「客観的な眼」で冷静に見聞きすることが、何よりも大事なことになるということである。

\*

\*

ところで、なぜ、この世には「ファン」というものが存在していて、その人たちは、ある「対象」に対して異常なほど夢中になっているのだろうか？ その「ファン心理」とは、一体、何なのかと敢えて問えば、それは、次のようなものになるかと思う。

つまり、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めている。それゆえ、何か「興味や関心」の持てるようなものをいつも探し求めていることになるが、やがて、何かその人にとって気に入った対象が見つければ、その時点から、その対象との「関わり」（交流）が始まるとともに、次第に深まっていくことになるかと思う。

例えば、プロ野球のあるチームが大好きであり、それゆえ、球場にまで応援に行ったり、或いは、テレビを観ながら応援をしている人たちも非常に多いかと思う。その場合、ふうう応援をしているチームが勝とうが負けようが、それによってその人自身が直接何か得をするというわけでもないのに、なぜ自分が応援しているチームが勝つと大喜びしたり、一方、逆に負けたりすると、非常に悔しがったり、不機嫌な心の状態になったりするのだろうか。考えてみれば、これは、確かに不可思議な「心の働き」であり、もしわれわれ人間が、いわゆる「利害損得」だけで生きていけるような存在であるならば、そのような「心の働き」というのは、決して起こりようがないものである。

それでは、それは、いわゆる「好き・嫌い」の感情から生じるものなのだろうか。恐らく、そういう場合がいちばん多いのだろう。それでは、ある対象が「好き」だというのは、一体、どういうことかと言えば、それは、その人の「心」がその対象に対して、感情的にも感情的にもあるいは知性や理性的にも、それなりに「好意や好感」などが持っているとということであり、それは、言葉を換えれば、その人の「心」にとつては、まさに「交流しやすい対象」ということになるのだろう。逆に、ある対象が「嫌い」だというのは、感情的にも感情的にもあるいは知性や理性的にも、その人の「心」が何らかの「嫌悪感や拒絶反応、その他」などを示すようなものであり、それは、言葉を換えれば、その人の「心」にとつては、まさに「交流しにくい対象」ということになるのかも知れない。

われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めているとともに、特に「好きなもの」（或いは心の底から気に入っているもの）とは、どこまでも深く

交流したいという「心の働き」があるということである。なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、ある対象とどこまでも深く交流できているような時こそは、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているからである。——つまり、その人がほんとうに心の底から気に入っていて、しかも、どこまでも深く「共感・共鳴・同感」できるようなもの、例えば、その人の最もお気に入りの「人間、動物（ペット）、植物（園芸用品）、自然の風景、また、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、漫画、アニメ、絵本、イラスト、CD、DVD、ゲーム、食べ物、収集品、その他」、何であれ、そのような対象とどこまでも深く関わり、どこまでも深く溶け合っているような時こそ、その人は、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているということである。なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるものを求めている」とともに、その交流できるもの、どこまでも深く溶け合っているような時こそは、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているからである。それは、次の「人間と人工物」との交流の場合でも、基本的には全く同じことになるかと思う。

### 三、人間と人工物との交流

それでは、その「人間と人工物」との交流について、少し考えてみたいと思うが、この世にはもう実に膨大かつ多種多様な「人工物」に満ちあふれているわけである。例えば、衣服類をはじめ、下着類、履物類、家具（寝具）類、乗物類、交通網、また、様々な機械類、建築物、電化製品類、書籍類、おもちゃ・ゲーム類、バッグ・カバン類、時計・付属品類、化粧品類、運動用具類、美術品類、食料品類、その他、もうありとあらゆる「人工物」があり、その「人工物」との交流ということになるわけである。

例えば、食べ物であれば、その人の「最も好きな食べ物」を食べているような時こそ、その人の「心」は、最も満たされた「心の状態」になっているだろうし、また、ゲームであれば、その人の「最も気に入っているゲーム」に取り組んでいるような時こそ、その人の「心」は、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているということである。それは、もうすべての「人工物」との「交流」に対して言えることである。

例えば、その人の「最も気に入っている衣服や付属品」などを身につけている時こそ、その人の「心」は、最も満たされた「心の状態」になっているだろうし、また、その人の「最も気に入っている映画やテレビあるいは音楽や本（雑誌）」などを見聞き読んだりしているような時こそ、その人の「心」は、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているということである。あるいはその人が最も欲しがっていた「車やオートバイ」などを手に入れて、それを乗りまわしているような時こそ、その人の「心」は、最も充実した、また、最も満たされた「心の状態」になっているということである。そのようにわれわれ人間の「心」というのは、いつも「何か交流できるもの」を求めているとともに、特に「好きなもの」（或いは心の底から気に入っているもの）とは、どこまでも深く「関わる」（交流）したいという思いが、間違いなくあるということである。

それでは、「人工物」とは、いったいどういうものかと問えば、それは、われわれ人間がこの世に生み出した実に膨大かつ多種多様な「人工的なもの」ということになるかと思う。そして、われわれ人間がこの世にものを創り出す場合には、まったくでたらめにも

を創り出したりはしないだろう。必ず、ここはこのようなした方がよいだろうというように、あれこれ思索を重ね、手を加えた結果として、その人(たち)なりに「まあ、これでよいだろう」という感じのものになっているかと思う。そうだとすれば、それぞれの「人工物」の内部(或いは外部)には、必ずそれを考案し創り出した人たちの「考えや想い」などが内在(或いは現出)しているということになるかと思う。

われわれは、ふだんいろいろな「人工物」を見ても、それらをただ単に物質的な存在ぐらいにしか思わないものであるが、しかし、それがどのような「人工物」であっても、その「人工物」の内部(或いは外部)には、必ずそれを考案し創り出した人たちの「考えや想い」などが内在(或いは現出)しているものであり、それゆえ、それがどのような「人工物」であっても、それは、ただ単なる物質的な存在であるというよりは、むしろそれを考案し創り出した人たちの「考えや想い」などが内在(或いは現出)している「物質的存在」であり、それらは、決して偶然的産物などではなく、人間的な「意味や価値」等が付与された存在であるということである。

それゆえ、それがどういう人工物であっても、その「人工物」と深く「交わる」(交流する)ということは、ただ単に物質的な存在と「関わる」(交流する)というようなことでは決してなく、それは、その人工物を創り出した人たちの「考えや想い」(敢えて言えば「心」)とも深く交わることになるということである。

例えば、すし屋やラーメン屋ですしやラーメンなどを食べるというのは、ただ単にすしやラーメンなどを食べるというようなことだけに留まるものではない。それは同時に、そのすしやラーメンなどを創っている人たちの「考えや想い」(敢えて「心」)とも深く交わることになるわけである。また、ある衣装が気に入って、それを身につけるということとは、ただ単にその衣装を身にまとうというようにただに留まるものではなく、それは同時に、その衣服を創った人たちの「考えや想い」(つまり「心」)とも深く交わることになるわけである。——それは、例えば、「履き物、バッグ、カバン、付属品、その他」<sup>アクセサリ</sup>、何であれ、すべてに言えることであるが、それらを創っている人たちは、ああでもないこうでもない<sup>アタリ</sup>とあれこれ考えた末に、これは、こういう「色や形あるいは素材」で創ろうという<sup>アタリ</sup>ことで、創られるわけである。それゆえ、その品物には、必ずそれを創った人たちの「考えや想い」(つまり「心」)が内在(或いは現出)していることになる<sup>アタリ</sup>とともに、その品物が気に入って、それを好んで身につけているということは、すなわち、その品物に内在(或いは現出)している創り手の「考えや想い」(つまり「心」)とも深く交わっているということである。——同じように、いろいろな「映画、音楽、雑誌、書物、ドラマ、ビデオ(DVD)、その他」などを好んで見聞き読んだりすることも、ただ単にその内容を見聞き読んで楽しむというようなことだけに留まるものではなく、それは同時に、それらを創った人たちの「考えや想い」(つまり「心」)とも深く交わることになるのである。

つまり、われわれ人間の身のまわりにあるありとあらゆる「人工物」が、なぜ、このような「姿、形、色、音、言葉、大きさ、重さ、材料、機能、構造、配置、内容、その他」等になっているのかと言えば、それは、(例外ややむを得ない場合などは除いて)、それらすべては、それらを創り出した人たちが、そのような「姿、形、色、音、言葉、大きさ、重さ、材料、機能、構造、配置、内容、その他」等にするのがよりよいだろうという「考えや想い」(つまり「心」)から生み出されてきたものである。それゆえ、「人工物」と深

く「交わる」（交流する）ということは、ただ単に物質的な存在と交わるといふようなことでは決してなく、それは、それを創り出した人たちの「考えや想い」（つまり「心」）とも深く交わることになるわけである。つまり、それは、いかなる「人工物」であつても、その「人工物」にはそれを創り出した人たちの「考えや想い」（敢えて「心」）が内在（或いは現出）していることになるわけである。それゆえ、いわゆる「人工物」というのは、ただ単なる物質的な存在であるというよりは、むしろそれを考案し創り出した人たちの「考えや想い」などが内在（或いは現出）している物質的な存在であり、それは、決して偶然の産物などではなく、人間的な「意味や価値」等が付与された存在であるといふことである。

\*

\*

（「交流欲Ⅱ」へと続く。）